

各地の取り組み紹介 岐阜県多治見市

親の育ちを支援することは、親自身を信頼すること

NPO法人まあーる 牧野 民賀

自立する道を選択して

私が所属する「NPO法人まあーる」は、誕生して2年が経とうとしています。平成22年4月、法人として認証されました。それ以前は“子育て支援グループまあーる”として3年間活動してきましたので、“まあーる”として子育て支援に関わって5年が経とうとしています。

“子育て支援グループまあーる”は、平成19年3月多治見市子ども情報センター市民委員会の有志が集まって発足しました。全国で4番目に制定された「多治見市子どもの権利に関する条例」の精神にのっとり、子育て・子育ての拠点として図書館分館を「子ども情報センター」としてリニューアルオープンするにあたり、市民の声を活かそうと集まったのが市民委員会のメンバーでした。その中でも、特に乳幼児とその親に対する支援を行いたいと考える者が集まってできたのが“子育て支援グループまあーる”です。

ちょうど全国的に「つどいの広場」が展開され始めた頃で、最初の3年間は多治見市からの補助金をもらい“おしゃべりサロン”や“まん・まあーる広場”として親子の集う場を運営してきました。その後多治見市が「つどいの広場」を常設するにあたり、児童館併設型となり、広場を運営するためには、児童館の指定管理者となる必要がありました。当時は法人格も取得しておらず、とても自分たちの力量では無理だという判断をしました。しかし、今までやってきたことを無にしてしまふにはあまりに惜しく、それならば自立する道を選択し、法人格を取得し、空き店舗を貸してくれる人を探し、新たに「まん・まあーる広場」を開くことができました。助成金だのみの運営で、自転車操業のような毎日ですが、来てくれるお母さんや子どもの成長をたくさん目の当たりして、私たちの活動はとても意味のあるものだと思っています。

まずは親を支えなければ

私自身が初めて子育て支援に関わったのは、名古屋女性会館の託児グループたんぼぼ(現:特定非営利活動法人子育て・子育てNPOたんぼぼ)に所属し、活動したことです。ここでの活動を通して、何の力も持たない“普通の主婦”でも、自分の思いを形にして、社会に働きかけることができるということを学びました。

そして1997年夏、多治見市に引っ越してきた私は、多治見でも託児をやりたいと、託児付講座の主催者に直接「託児をさせてください」と電話をしました。そこで現在の“まあーる”の理事長である宮村登美子さんと出会いました。



その後宮村さんや他の仲間と共に「託児グループおひさま」を立ち上げたり、多治見おやこ劇場などで活動する中で、子どもが健やかに成長していくためには、まず親自身が安心して安定した状態で子育てできることが必要だ、子どもの育ちの支援をするためには、まずは親を支えなければと思い始めました。

そんな時、目に留まったのがNobody's Perfect(NP)プログラムでした。「初めから完璧な親はいない。みんなに支えられながら親になっていくんだ」という言葉が、私の心に響きました。

BPは意味があるものだと感じて

2009年12月にNPファシリテーター養成講座を受講し、翌年5月には講座を開くことができました。実施中はセッション計画を作るのに本当に苦労しました。何度もトレーナーに指導を受けながら、毎回のセッション計画は前日ギリギリまで悩んでいるような状態で、なんとか講座を終えることができました。こんなファシリテーターではないかと、とても心配でしたが、プログラム終了後の同窓会で顔を合わせた時に、参加者から“日常の中で「体験学習サイクル」を思い出している”という話を聞いた時に、改めてNPプログラムの持つ力を実感しました。しかし、いろいろな事情から、なかなか2回目のNPプログラムを実施できずにいました。

そして昨年、会報でBPプログラムの開発を知りました。4回という講座の回数や母子が一緒に託児が不要というところが、NPよりは少し手軽にできるのでないかという印象を持ちました。

広場の中で出会うお母さんから「赤ちゃんとの生活は、想像していたものとはずいぶん違う」という声を聞いたことがありました。不安気で、赤ちゃんとの生活に戸惑っているようにもみえるお母さんにとってBPプログラムはとても意味のあるものだと感じ、是非自分でもやってみたくてBPファシリテーター養成講座を受講しました。

親子が安心して自分らしく生きていける環境を作っていきたい

うれしかったこと2つ

その後、早速多治見でも広げたいと、パンフレットなどを持って保健センター、子ども支援課に働きかけました。ちょうど市で「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」の公募があったので申請しましたが、残念ながら採択されませんでした。しかし、市の担当の方が他の補助金でこの企画を実現できるように計らっていただき、昨年末「BPプログラム」の開催と多治見市で初の「BPファシリテーター養成講座」を実施することができました。

「BPファシリテーター養成講座」を実施した中で、うれしいことが2つありました。1つは保健師さんが5人、市の子ども支援課の方も1人と、行政関係者が6人も受講してくれたことです。講座が終わって保健師さんからは、「本当に良かった。参加した人同士でとても盛り上がり話ができたと」などと言われ、BPの良さをしっかりと実感してもらった様子でした。2つ目は“まぁーる”のママスタッフが3人も受講してくれたことです。ママスタッフというのは、広場の利用者だったママが子どもと一緒にスタッフとして活動している人たちのことです。まだまだ小さな子どもを持つ彼女たちにとって土・日の、しかも朝から晩までという時間は子どもの預け先の確保を初め、とてもハードルが高いのではないかと考えていました。しかし、3人も人が受講してくれました。その後、彼女たちは日常の活動の中でもとても積極的になったように思います。「早くBPプログラムを実施したい」と、意欲満々です。

よけいな声をかけなくて良かった

今回、多治見でのBPファシリテーター養成講座では、私は受講する当事者ではなかったので、主催者として少し客観的に講座を聞かせることができました。そして「ファシリテーターは黒子」というフレーズが印象に残りました。BPの基本的考え方である「親は基本的に子どもを大切にし、いい親になりたいと思っている」という親への絶対的信頼感。毎日の活動の中で、どうしてもおせっかいな性分が顔を出し、広場に来る親子にも必要以上に手も声もかけてしまっていたように思い、強く反省しました。

講座終了後しばらくして、ある親子が遊んでいる場面に出会いました。子どもがトンネルの中から顔をのぞかせています。お母さんはあまり子どもと遊ぶことが得意ではなさそうです。今までの私なら「お母さん、今、この子に『ばぁー』って声かけてあげたらとっても喜ぶよ」と、言っていたと思います。でも、それをグッと抑えて二人を見てみると、お母さんはちゃんと子どもに答えて「ばぁー」と声をかけました。二人で楽しそうに笑い合っています。よけいな声をかけなくて良かったと思いました。親の育ちを支援するというこ

とは、親自身を信頼することだと、しっかりと心に刻みました。

BPは参加者が来なくなるプログラム

12月には初めての「BPプログラム」を実施しました。参加者は7名。研修会などでも聞いていましたが、やはり、寒い時期に親子を集めるのはなかなか難しいものがありました。寒い中、まだ小さいわが子を連れて本当にお母さんたちは来てくれるだろうか、途中でやめてしまう人がいるのではないかと、など始める前から心配していましたが、それは杞憂に終わりました。予定があって欠席された方以外は誰も休むことなく、みんなちゃんと来てくれました。BPは参加者が来なくなるプログラムなのだと思感しました。

参加者からは「同じくらいの月齢の赤ちゃんを持つお母さん同士、こんなふうに話ができるとても良かった」「自分だけ、うちの子だけだと思っていたことが、みんなも同じなんだとわかって楽になれた」「いろいろなシートを記入しながら考えることで、客観的に自分を見ることができた。意外に私って頑張ってるな、と思えた」などなどBPプログラムのねらいをきちんと受け取ってもらえました。



今回の養成講座の中で「参加者を信じること」「プログラムの中で学ぶものは、参加者にまかせること」と言われたことを頭においてプログラムを進めました。ファシリテーターとしてはまだまだ力不足ですが、もっともっと研鑽を積んで、少しずつでも進化していけたらと思っています。

小さい時からよく知っている他人

新しい年が明けました。春には“まぁーる”もNPO法人となって3年目になります。助成金を申請しながらの活動はとても不安定です。来年度の具体的な資金計画は立っていません。しかし、なんととしてでも続けていきたいという強い思いだけは持っています。自分自身の子育て経験から、子どもを親の手だけで育てるのは無理であり、困った時こそ“よく知ってる他人”が必要なんだということをもっと知っています。「初めての子育て」で不安を感じるのは、子どもが幼い頃だけに限りません。成長すればするほど、その問題や心配事は複雑なものとなっていきます。「まんな・まぁーる広場」も、将来的には0～18歳までの子どもとその親にまで対象を広げていきたいと考えています。何かあったときに“小さい時からよく知ってる他人”の一人になって、親子を支えていきたい。まずはBPプログラムを多治見のすべての親子に届けられるように、そしてそれをきっかけにつながり広がっていく、多治見に暮らす親と子が、安心して自分らしく生きていける、そんな環境をつくっていききたい、それが私たち“まぁーる”のミッションだと考えています。